

霧の不二、月の不二

——明治三十六年八月七日御殿場口にて観察——

小島烏水

青空文庫

不二より瞰^みるに、眼下に翻^{ほん}展^{てん}せられたる凸版^{レリイヴオ・マツ}地図^ツの如き平原の中白面^{うち}の甲府を匣^めぐりて、毛ばだちたる皺^{しわ}の波を畳^たみ、その波頭に鋭^{えい}峻^{しゅん}の尖^{とが}りを起^たてたるは、是^これ言^いふまでもなく金峰山、駒ヶ嶽、八ヶ嶽等の大嶽にして、高度いづれも一万尺に迫り、必ずしも我不二に下らざるが如し、不二は自らその高さを意識せざる謙徳の大君なり、裾野より近く不二を仰ぐに愈^いよ低^いし、偉人と共に家庭居^{まとゐ}するものは、その那边^{なへん}が大なるかを解する能^{あた}はざるが如し。この夏我金峰山に登り、八ヶ嶽に登り、駒ヶ嶽に登る、瑠璃^{るり}色なる不二の翅脈^{しみやく}なだらかに、絮^{じよ}の如き積雪を膚^{はだ}の衣に著^つけて、悠々^{いうく}と天空に伸^のぶるを仰ぐに、絶高にして一朵^{いちだ}の芙蓉^{ふよう}、人間の光学的分析を許さざる天色を佩^おぶ、我等が立てる甲斐の山の峻^{しゅん}峭^{せう}を以てするも、近づいて之^{これ}に狎^なるゝ能はず、虔^つしんでその神威を敬す、我が生国の大儒、柴野栗山先生讃^{さん}嘆^{たん}して曰^{いは}く「独立原無競、自為衆壑^{しゅうかく}宗^{そう}」まことに不二なくんば人に祖先なく、山に中心なけむ、甲斐の諸山水を跋^{ばつ}渉^{せふ}しての帰るさ、東海道を汽車にして、御殿場に下り、登嶽の客となりぬ。

旅館の主人、馬を勧め、剛力^{がうりき}を勧め、蓆^{ござ}を勧め、編笠^{あみがさ}を勤^あむ、皆^{しりぞ}之^をを卻^{しりぞ}く、この極楽の山、只^{ただ}一本の金剛杖^{こんがうづゑ}にて足れりと広舌^{くわうぜつ}して、朝まだき裾野を往^ゆく。

市街を離れて里許、不二の裾野は、虫声にも色あり、そよ吹く風にも色あり、色の主を花といふ、金色星の、夕下界に下りて、莖頭に宿りたる如き女郎花、一輪深き淵の色とうたはれけむ朝顔の、闌秋に化性したる如き桔梗、蜻蛉の眼球の如き野葡萄の実、これらを束ねて地に引き据ゑたる間より、樅の木ひよりと一際高く、色波の旋律を指揮する童子の如くに立てるが、その枝は不二と愛鷹とを振り分けて、殊に愛鷹の両尖端（右なるは主峰越前嶽にして位牌ヶ嶽は左の瘤ならむ）は、躍つて梢に兎耳を立てたり、与平治茶屋附近虫取撫子の盛りを過ぎて開花するところより、一里茶屋に至るまで、焦砂を匂はすに花を以てし、夜来の宿熱を冷やすに刀の如き薄を以てす、雀おどろく茱萸に、刎ね飛ばされて不二は一たび揺曳し、二たびは青木の林に落ちて、影に吸収せられ、地に消化せられ、忽焉として見えなくなりぬ、満野肅として秋の気を罩め、騎客草間に出没すれども、惨として馬嘶かず、この間の花は、磧撫子、螢袋、擬宝珠、姫百合、欵芰、唐松草等にして、木は百中の九十まで松属の物たり。

一里松附近より、角度少しく急にして、大木を見ず、密々たる灌木、疎々たる喬木の混合林となりて、前者を代表するに萩あり、後者には栗多く、それも大方は短木、この辺より不二は奈良の東大寺山門より大仏を仰ぐより近く聳え、半より以上、黄檗

は古びて赭く、四合目辺にたなびく一朵の雲は、垂氷の如く倒懸して満山を冷やす、別に風より迅き雲あり、大虚を亘りて、不二より高きこと百尺許なるところより、之を翳し、山膚に輝を入る。雲消えて輝も亦拭ひ去らる、山色何の瑠璃ぞ、只だ赭丹赭黄なる熔岩の、奇醜大塊を、至つて無器用に束ねて斬立せるのみ、その肩を怒らし胸を張れるを見て、淑美なる女性的崇高を知らず。

馬返しより太郎坊まで、羊齒の小自由国や、蘚苔の小王国を保護して、縦落葉松の純林、戟を揃へて隣々相立てるあり、これありて裾野の柔美式なる色相図に、剛健なる鉄銹色を点し、無敵の冬をも呵して、一路空山料峭の天に向ひて立つものあるなり。

太郎坊を出づるや一変して喬木を見ず、灌木はミヤマ榛の木の瘦せさらばひたるが僅に数株あるのみ、初めは草一面、後は焦沙磊々たる中に、虎杖、鬼薊及び他の莎草禾本を禿頭に残れる二毛の如くに見るも、それさへ失せて、霧沸々として到るに遇ふ、天そゝり立つ大嶽とは是れか、眼前三四尺のところより胴切に遇ひて、殆んど山の全体なるかを想はしむ、下界屢は見るところの井桁ほどなる雲の穴より或は皺を延ばし、或は畳めるは、応にこの時なるなからむや、今は山と、人と、石室と、地衣植物と、尽天地を霧の小壺に蔵せられて、混茫一切を弁せず、登山の騎客は悉く二合二勺にて馬を下

る。

二勺より路は黒鉄くろがねを鍛へたる如く、天の一方より急斜して、爛沙らんさ、焦石せうせき、截々せつく、風の噪さわぐ音して人と伴ひ落下す、偶たまま雲を破りて額上かす微かに見るところの宝永山の赭土あかつちより、冷乳の缸かめを傾けたる如く、大霧を揺ゆるよと見る間に、急瀬きふらい上下に乱流する如くなりて、中霄ちゆうせうに溢あふれ、片々だんく団々だんく、さかれて飛んで細かく分裂するや、シヤボン球の如き小薄膜となり、球々相摩擦まさつして、争ひて下界に下る、三合四合、皆天には霧の球、地には火山の弾子だんし、五合目にして一天の霧漸く霽はれ、下に屯よどめるもの、風なきに逆さかしまに颺あがり、故郷を望んで帰り去いなむを私語さぎめく。この登山に唯一のおそろしきものゝやうに言ひ做なす、胸突むなつき八丁にかゝり、暫く足を休めて後を顧かへりみ、天は藍色に澄み、霧は紫微しびに収まり、領ひ巾れの如き一片の雲を東空に片寄せて、透すきわたりたる宇宙は、水を打つたるより静かなり、東に伊豆の大島、箱根の外輪山、仙窟せんくつに醸かもされたる冷水の如き蘆あしの湖、氷上を蹴すべりて僵たふれむとする駒ヶ嶽、神山、冠ヶ嶽、南に富士川は茫々ぼうくたる乾面上に、錐きりにて刻まれたる溝みぞとなり、一線の針を閃ひらめかして落つところは駿河の海、銀の砥平しろがねとらかに、浩蕩かうたうとして天と一いつに融とく。

銀明水に達したるは午後七時に垂なんなんとす、浅間社前の大石室に泊す、客は余を併せて四

組七人、乾魚一枚、麩の味噌汁一杯、天保錢大の沢庵二切、晚餐の総べては是の如きのみ、葉マキ虫の葉を綴りて寝ぬる如く、一同皆蒲団に包まりて一睡す。

夜九時、大風室を四匝せる石壁を透徹して雷吼す、駭魄して耳目きはめて鋭敏となり、昨夜御殿場旅館階上の月を憶ひ起し、一人窃に戸を排して出で、火孔に吹き飛ばされぬ用心して、這ふが如く剣ヶ峰に到り、その一角にしがみ附きて覷る。

霧収まりて天低う垂れ、銀錫円盤大の白月、額に当つて空水流るゝこと一万里、截鉄の如き玄沙條忽として黒玻璃と化す。雲の峰一道二道と山の腋より立ち昇りて、

神女白銀の御衣を曳いて長し、我にいま少し仙骨を有するの自信あらば、駕して天際に達する易行道となしたりしならむ、下は即ち荒邈として、裾野も、森林も、一面に大瀛の如く、茫焉として始処を知らず、終所を弁ぜず、長流言はずや、不二の根に登りてみれば天地は、未だいくほども別れざりけりと、まことや今日日本八十州、残る隈なく雲の波に浸されて、四面圜海の中、兀立するは我微軀を載せたる方幾十尺の不二頂上の一撮土のみ、このとき白星を啣める波頭に、漂ふ不二は、一片石よりも軽且小なり、仰げば無量無数の惑星恒星、爛として、吁嗟億兆何の悠遠ぞ、月は夜行性の蛾の如く、闇けて愈よ白く、こゝに芙蓉の蜜腺なる雲の糸をたぐりて、天香を吸収す、脚下紋銀白色

をなせる雲を透かして、僅に瞰ひ得たり、この芙蓉の根部より匍枝を出だしたる如き、宝永山の、鮮やかに黒紫色に凝固せるを、西へと落ちたる冷魂の、銹におぼろなる弧線を引いて、雲と有耶無耶の境地に澄みかへれるは本栖湖にやあらむずらむ。雲は寄る寄る崖を噛んで、刎ね返されたる倒波の如きあり、その下層地平線に触れて、波長を減じたるため、上層と擦して白波の泡立つごときあり、之を照らすにかの晃々たる大月あり、その光被するところ、総べてを化石となす、試に我が手を挙ぐるに、晶きこと寒水石を彫り成したる如し、我が立てる劔ヶ峰より一步の下、窈然として内院の大窖あり、むかし火を噴きたるところ、今神仙の噫氣を秘蔵するか、かゝる明夜に、靉靆として立ち昇る白氣こそあれ、何物たるかを端知せむと欲して、袖底に耐風マツチを擦するも、全く用を成さず、試に拳石を転ずるに、鳴鏑の如く尖りたる声ありて、奈落に通ず、立つこと久しうして、我が五躰は、悉く銀の鍼線を浴び、自ら駭くらく、水精姑く人と仮幻したるにあらざるかと、げに呼吸器の外に人間の物、我にあらざるなり、おもひみる天風北溟の荒濤を蹴り、加賀の白山を拍ちて旋へらず、雪の蹄の黒駒や、乗鞍ヶ嶽駒ヶ嶽を掠めて、山靈木魂呐喊を作り、この方寸曠古の天地に吹きすさぶを、永冷齒に徹し、骨に徹し、襦袍二枚に夜具をまで借着したる我をして、腮を以て齒を打たしむ、竟に走つ

て室に入り、夜具引き被^{かづ}きて、夜もすがら物の怪^けに遇ひたる如くに顫^{おの}きぬ。

翌朝四時十五分といふに、床を蹴る、未だ日の出を見ずして、大島、利島、御蔵島の、
糝糊^{もち}の間に活^いきて遊ぶにあらざるかを疑ふ、三浦半島と房総と、長虫の如く蜿蜒^うねりて出沒
す、武甲の山は純紫にして、蒸々たる紅玉の日、雲の三段流れに沁^しみ入りて、眩^{げんく}光^{わう}を
斜に振り飛ばすや、劔ヶ峰の一角先づ燧^{ひうち}を発する如く反照し、峰に倚^よれる我が髭燃えむと
す、光の先づ宿るところは、棟高^{むね}き真理の精^{しやうじや}舎にあるを念^{おも}ふ、太陽なる哉^{かな}、我は現世
に在^いりて只太陽^{たい}を讃^{さん}するのみ、顧れば甲武の山の若紫を焼いて、山肩^{せんしよく}茜色^{せきしよく}の暗潮一味
を刷^はく。

下りて七合目に至る、霜髪^{おきな}の翁、剛力の肩をも借らず、杖つきて下山するに追ひつく、
郷貫^{きやうくわん}を質^たせば関西の人なりといふ、年齒^{ねんし}を問へば、即^{すなは}ち對^{こた}へて曰^{いは}く、当年八十四歳に
なります！

青空文庫情報

底本：「日本の名随筆58 月」作品社

1987（昭和62）年8月25日第1刷発行

底本の親本：「小島烏水全集 第四巻」大修館書店

1980（昭和55）年3月

※底本は、物を数える際や地名などに用いる「ケ」（区点番号586）を、大振りにつくっています。

※「劔ヶ峰／剣ヶ峰」の混在は底本の通りです。

入力：土屋隆

校正：門田裕志

2006年9月21日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.aozora.gr.jp/>）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

霧の不二、月の不二

——明治三十六年八月七日御殿場口にて観察——

2020年 7月17日 初版

奥 付

発行 青空文庫

著者 小島烏水

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>